

---

## 沖縄の歴史情報研究への関わり

豊見山 和行：琉球大学教育学部

---

私のワープロとの出会いは、大学院の博士課程在学中であった。その後、パソコンを使うようになったが、ほぼ8年間はおっぱらワープロソフト（一太郎）を延々と使用するだけのパソコン超ビギナーにすぎなかった。その間にマックのハイパーカードの利点を聞きかじり、マックへの転身を思案していた折りに、この重点領域に関わることになった。

当初、研究課題について明確なイメージを抱くことはできなかった。領域代表者の岩崎宏之氏による溢れんばかりの説明を伺いながらも、今ひとつ手応えを感じる事ができなかった。その内、暗中模索する中でデータの構築に着手し、「桐」を使って首里系の家譜（「那覇市史資料篇」）をデータベース化してはじめて、パソコンをようやく身近な道具と感じるようになった。その後、95年にOSがWindows3.1からWindows95へ劇的に変化し、パソコン環境は私のようなビギナーには一層身近なものとなった。使えそうなパソコンソフトを手当たり次第にインストールし、使い勝手をあれこれ試すうちにパソコンソフトではシンプルなエディターソフトに出会った（目下、使用ソフトは「WZ エディター」：ピイレッジセンター）。マックのハイパーカードに惹かれたのは、論文を作成する際、史料カードをパソコンで処理している哲学研究者の実例を以前に読み、その印象が残っていたからだが、それをエディターソフトで代用できないものかと考えたのである。

もっぱら文献＝文字データを使用するものにとって、膨大な文献史料から瞬時に目指すデータ（文字列）を検索するができれば、旧来の史料カードによるデータ整理は必ずしも必要ではなくなる（もちろん、テキスト化されていない原史料からの筆写・抜粋は必要だが）これまでワープロで打ち込んだデータをテキスト・ファイルに変換し、ハードディスクへ放り込むだけで、フルテキストデータベースを作ることができることも利点のひとつであった。

整然としたフィールドの中に見栄えよく整理されたデータベースも魅力的だが、労力をつぎ込む割にはあまり使用されないことがある。作成したデータベースがフィールドの設定などで作成者の個性が表れるため、利用しにくいということがおこる。もっぱら文字データを利用する研究者にとって、データが整然としている必要はない。史料名・年代・出典などが分かれば、「素のデータ」（テキスト・データ）でも十分利用に耐えうる。

フルテキストをデータベースとして利用する。今の私の研究水準ではそれで間に合う。下手に加工したデータベースよりも「素のデータ」を提供し、利用者が使い勝手が良いように工夫するほうがむしろ有効なように思える。そのような結論（こじつけ？）の後は、ひたすらフルテキストの作成に取りかかった。そして、いくつかのフルテキストデータを作成することができた。この重点領域研究が終了した後も必要とする史料のテキスト化を継続し、フルテキストデータを充実させて行きたい。